

## 薫と浮舟

——「宇治十帖」後半部の物語における男と女——

### 金 兌映

はじめに

物語の主人公は単に登場する分量の多少という問題を超えて作品の構成や展開方向など、あらゆる面で実に深い意味を有している。そうした意味で物語の方法というのは主人公の意味そのものとも深い関連性を持つといえる。主として小野で蘇生した浮舟が出家に至るまでの経緯を追っている手習巻には、浮舟の心情表現とともに、多くの独詠歌、手習歌が配されている。これらの歌や表現は、いわゆる「語らぬ女」として、その内面世界が作品の展開と深く関わり合うことのない浮舟というヒロインの内面的な成長を示していると同時に、第三部の後半に入り、男性主人公から女性主人公へと物語の中心が移動していることも関わり

り合う点で、手習巻の方法を考える上で注目される。

手習巻の中將挿話をめぐっては「あはれ」に満ちた表現が描き出されることにより、現実の苦悩の中に孤絶する浮舟との断絶が浮かび上がり、結果として「あはれ」が色を失い相対化される構造が見られると指摘する論<sup>〔1〕</sup>と同じく「あはれ」の語に着目し、中將の挿話が「薫型」の人物が薫に類似した感情をいだいて浮舟の前にあらわれるという構想を持つという論<sup>〔2〕</sup>が宇治十帖を読解するための重要な示唆を与えてくれる。男主人公が姿を現さない中、それを髣髴させる人物が女主人公と関わり合い、その出家の引き金となるという物語展開の意味するもの、続編の主人公をめぐる物語の方法について、もう少し踏み込んで考えてみる必要があるように思う。本稿は、薫と浮舟の関係について、そ

して薫という主人公そのものについて考えてみようとするものである。浮舟の手習歌を視座に、彼女が出家に至るまでの心情の変化をたどりつつ、手習巻の中將挿話を中心に「主人公」をめぐる男女の構図を描き出し、主題を導き出すための手習巻の方法について考察する。

一

宇治川に身を投げたと思われる浮舟が蘇生するまでの物語においては、横川の僧都の助けと妹尼たちの保護が大きき役割を果たしている。浮舟は、小野の庵に移されてもなかなか正氣に戻らなかったが、夏の終り頃、妹尼の懇願に下山した僧都の加持祈禱によってようやく意識を回復する。浮舟は、自分の失踪前後のことを回想し戸惑いながらも、出家したい意向を妹尼に伝えるのであるが、その場面には「心には、なほいかで死なんと思ひわたりたまへど、さばかりにて生きとまりたる人の命なれば、いと執念くて」(⑥二九八)と、死にたいと強く願っても死ねなかつた命のしぶとさが語られている。手習巻における最初の浮舟の手習歌においても、浮舟の「死」への意志を読み取ることができる。

なほあさましくものはかなかりけると、我ながら口惜

しければ、手習に、

身を投げし涙の川のはやき瀬をしがらみかけて誰  
かとどめし

思ひの外に口惜しければ、行く末もうしろめたく、疎  
ましまで思ひやらる。(手習⑥三〇二)

蘇生した浮舟が最初に口にした言葉は「夜、この川に落とし入れたまひてよ」(⑥二八八)というものであった。意識不明の状態で四月五月が過ぎ、僧都の加持祈禱によってようやく意識を回復した浮舟は、自分の失踪前後のことを回想し始める。それは「我は限りとて身を投げし人ぞかし」(⑥二九五―六)という記憶に始発する。浮舟は、意識を失っていた間のわが姿の「恥づかし」(⑥二九六)さ、死にそこなつた無念さを思い、食物をとることすら拒否する。右の場面における手習歌は、蘇生直後の浮舟の心情の延長上にあると言つてよいだろう。この歌は、月明の夜、小野の尼君たちの合奏を背景に詠まれている。琴や琵琶を演奏する人々の中で、浮舟はそういう教養を身につける機会がなかつた自分の身の上について考える。「月の明き夜な夜な、老人どもは艶に歌よみ、いにしへ思ひ出でつつさまさまの物語などするに、答ふべき方もなければ」(⑥三〇二)とあるように、もとより表現力という面では劣ると語られてき

た浮舟であつたし、東国で幼年時代を過ごしたため、都での思い出がなく、老人たちの話し合いに入る余地がないのである。後藤祥子氏は「身を投げし」の歌が発想の面で菅原道真の歌「流れ行く我は水屑となりはてぬ君しがらみとなりてとどめよ」にきわめて近いと指摘し「道真歌に纏綿する流離譚の孤高な印象は、浮舟の「身を投げし」の歌に響いていよう。…地の文にいう所の拙い生い立ちや無才の自覚とは、うらはらな誇り高さを、歌の力にはひそめているといえる」と述べる。手習の歌が「日常的風雅の世界を超えて屹立する」浮舟の精神を伝えていると言えよう。そして浮舟にとって小野は、彼女が強く希求していた「世の中にあらぬところ」でもあつた。

次に掲げるのは、「身を投げし」の歌につづく二番目の手習歌である。

はかなくて世にふる川のうき瀬にはたづねもゆか  
じ二本の杉

と手習にまじりたるを、尼君見つけて、「二本は、またもあひきこえんと思ひたまふ人あるべし」と、戯れ言を言ひあてたるに、胸つぶれて面赤めたまへるも、いと愛敬づきうつくしげなり。

(手習⑥三三四)

この一首は『古今集』の「初瀬川古川の辺に二本ある杉年

経てまたも逢ひ見む二本ある杉」(雑杼・旋頭歌・一〇〇九)を踏まえる。母や乳母に導かれて何度も初瀬にお参りをしたにも関わらず、そのかひもなく、死のうとした命までも心になわなかつた、と、浮舟は考える。王朝貴族社会の女性たちにとっての長谷観音信仰は、救済の宗教的意味のみならず、呪術的な現世利益を本質とするものであつた。そして浮舟の運命において重要な瞬間は常に観音と結びついていると言える。薫による浮舟のかいま見は、初瀬詣でから帰ってくる浮舟一行と宇治で来合わせた時に行われた(宿木⑤四八八)。二条院で匂宮に迫られた後、浮舟を慰め励ます乳母の言葉に「さりとて、初瀬の観音おはしませば、あはれと思ひきこえたまふらん。ならばぬ御身に、たびたびしきりて詣でたまふことは」(東屋⑥六八)ともあつた。そして入水自殺をはかり、失神状態で発見された浮舟を蘇生させたのは、初瀬詣での妹尼等の一行であつた。妹尼は「おのが寺にて見し夢ありき」(⑥二八六)と言い「ただ、わが恋ひ悲しむむすめのかへりおはしたるなめり」(⑥二八六・七)、或いは「いみじくかなしと思ふ人のかはりに、仏の導きたまへると思ひきこゆるを」(⑥二八八)と言っている。観音靈験譚の中には、観音が優婆塞などに身を変えて直接救う話もあるが「浮舟物語」では、妹尼や僧都たち

を導いて助けさせていると見るべきであろう。<sup>8)</sup>

引用文に続くところで、浮舟は「たびたび詣でさせしを、かひなきにこそあめれ、命さへ心かなはず、たぐひなきいみじき目を見るはいと心憂き」(⑥三三三〜四)と、初瀬参詣を拒否したが、浮舟が生きていること自体、長谷観音の恩寵といえるだろう。浮舟は、長谷観音が導いた妹尼や僧都たちに強く守られ、疲弊した心身を癒し、自らの生を觀照することができたのである。横川の僧都に調伏された(へののけ)の言葉に「されど觀音とざまかうざまにははぐくみたまひければ」(⑥二九五)と、浮舟の回生に長谷観音の靈験が関わっていることが暗示されていた。浮舟の手習歌は「浮舟自身は意識しないままに、結果として匂宮と薰のことを暗示した」形となった。が、薰と匂宮との再会の兆しは、歌に先立つ浮舟の心情表現にあらわにされておらず、こと匂宮に対しては「こよなく飽きにたる心地す」(⑥三三二)、もううんざりだと思ふ浮舟である。物語の叙述から見る限り、浮舟がはまだ匂宮への愛欲の思いを抱いていると見ることは難しいのではないか。物語の本文から見る限り、浮舟が死を決心したとき、最後まで後る髪を引かれたのは、母親への慕情であった。そして「はかなくて」の歌の直前で思い出されているのも、初瀬に母君とともに

詣でた日々のことである。今の浮舟にとって「またもあひ見む」人とは、母、そして乳母や右近のことを言うのに違いないあるまい(手習⑥三〇三)。「世」を棄てた今、もはや現世利益を求めすることもないと、妹尼の参詣勧誘を拒む浮舟であるが、肉親への恩愛の情だけは断ち切ることができなかった。浮舟にとって真の保護者たるべき存在は、彼女に本当の愛を教えてくれたかに見えた匂宮ではなかった。

## 二

手習巻にはじめて登場し「世の中にあらぬところ」(⑥三〇四)を求める浮舟の前に現れることで彼女の出家の引き金となる中将の存在は、物語の中で如何なる意味を有するのであろうか。ここでは、中将の懸想場面を中心に、彼が「薰と酷似した型の人物」<sup>10)</sup>であることに特に注目して当該巻における中将挿話の意味について考察する。

浮舟が小野の山里でようやく安定を取り戻しているところへ、妹尼の亡き娘の婿であった中将が懸想人として登場してくる。彼は、横川で修業する弟禪師の君を訪ねるついでに、度々小野の山里に立ち寄っていた。中将は、妹尼との会話の中で「昔を思し忘れぬ御心ばへも、世になびかせたまはざりけると、おろかならず思ひたまへらるるをり多

く」(⑥三〇六)と、その、妹尼の亡き娘に対する志が賞賛されてもいる。新しい人物中將の登場は、亡き娘の代わりに浮舟と、中將との縁組を期待する妹尼たちの心内が述べられていく中で、新たな恋の場面へと変わっていく。

室内から眺めている浮舟の視点に沿って語られる、中將の最初の登場の様子は、「前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出して、忍びやかにておはせし人の御さまはひざさやかに思ひ出でらるる」(⑥三〇四)と描かれている。「例の、忍びておはしたり」(浮舟⑥一四二)と、人目を避けて宇治に通っていた薫のことがここで想起される。「垣ほに植ゑたる撫子もおもしろく、女郎花、桔梗など咲きはじめたる」(⑥三〇五)、そうした前栽のなかに、色さまざまの狩衣姿の若い男たちを大勢引き連れ、同じような装束をして邸に入ってくる中將。その姿は、山里の人々に亡き娘の生前を追憶させ、できることなら浮舟をその身代わりとして中將と結ばせたいという思いを尼君に抱かせる。中將の懸想において「女郎花」に関わった表現が多く用いられていることが言われている<sup>①</sup>。

中將の最初の訪問の帰り際、「前近き女郎花を折りて、何にほふらん」と口ずさびて、独りごち立てり」(⑥三〇九)と記されている箇所注目したい。「ここにしも何にほふ

らん女郎花人のもの言ひさがにくき世に」(拾遺・雑秋・遍照・一〇九八)が引かれたこの部分で、中將の底意はこの歌の上句にあったのだが、人々は下句に重点を置いて受け取り、再び中將への賞賛が語られることになる。「姫部志」<sup>②</sup>「美人部師」「姫部四」「佳入部為」等と表記され、女性の比喩として用いられるこの「女郎花」という歌ことばは、とりわけ『源氏物語』において、「女であるというだけで、男性からの愛憐執着の対象となってしまう、女の生き難さ」<sup>③</sup>を暗示する言葉であると指摘される。手習巻の中將の登場場面に「女郎花」が頻用されるのは、中將が他ならぬ「矮小化された薫」であるため、この二人がともに、浮舟と相容れる境地にはないことを際やかに示すものであると小山香織氏は述べる。そして宿木巻の薫は、世の無常・はかなさの象徴である朝顔の花を「折りて持」ち、「女郎花をば見過ぎ」(⑤三九一)たと語られていたのだが、ここでの中將は「女郎花を折」ることで薫よりもさらに卑俗な存在であることを自ら示したものとなった。中將の浮舟への懸想は、浮舟の置かれた状況からして到底受け入れられないものであるが、中將の感情はひとりエスカレートし、浮舟の代理人格である妹尼と次のような和歌を贈答する。

(中將) あだし野の風になびくな女郎花我しめ結はむ

道とほくとも

(妹尼) うつし植ゑて思ひ乱れぬ女郎花うき世をそむ  
く草の庵に (手習⑥三二三)

「女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ」  
(古今・秋上・二三〇・左大臣時平)のように、「風」に「なびく」  
ものとして詠まれることの多い女郎花であったが、ここで  
中将はその女郎花に「我しめ結はむ」、わが物にしたいと  
性急に詠んでいる。第一句「あだし野」は、彼女自身の意  
思とは関係なしに薫と匂宮との二人の貴公子の間で板挟み  
になっていた浮舟の境遇からすると、実に皮肉というべき  
であろう。もとより浮舟は、小山氏の指摘どおり「既に自  
身を女郎花に喩えることもない」のであったが。

引用した贈答以外にも、中将と妹尼は「待乳の山」「鹿  
の泣く音に」「をちなる里」などの引歌を駆使して会話を  
交わすのであるが、こうしたやりとりは浮舟の内面とは全  
く無縁なものであった。中将の求愛の言葉は、恋の場面に  
ふさわしい古歌などに導かれていながら、沈黙する浮舟の  
「絶対的な孤独」の前で空転する、ひとりよがりのような  
ものになっている。そして言われるように、「山籠りもうら  
やましう、…今日は、みなはぶき棄ててものしはべりつる」  
(⑥三〇五、六)と言うその中将の道心の由来が明かされる

ことは、最後までないのである。薫の場合は、その道心が  
自己の出生への疑惑ゆえの身の不安に起因することが物語  
の最初の時点で語られていた(「おぼつかぬ誰に問はましいか  
にしてはじめもはても知らぬわが身ぞ」(匂兵部卿⑤二五))。

すなわち、「輝きを失い、矮小化され戯画化された中将の、  
まさしくその描かれ方の故に、薫が物語に再登場し、浮舟  
に何らかの関わりを持つ」と言えるのではないか。ここで  
は、さらに、主人公その人ではなく「矮小化され戯画化さ  
れ」た脇役の人をわざわざ登場させ、ヒロインとの構図の  
中で空転する様子を描いてみせた後、主人公その人を本格  
的に登場させる、その方法自体に注目したのである。竹  
河巻においては、玉鬘の姫君をめぐる求婚譚が中心の話  
題として展開する。玉鬘は、もともと薫を大君の婿にと望  
んでいたが、亡き夫鬘黒の遺志を思いかつて冷泉院の意に  
背いたことへの償いの気持もあって、大君を院へと心のつ  
もりである。薫は「まめ人」(竹河⑤六九)の世評を意識し「す  
き者ならばむかし」(⑤七〇)と、姫君たちの周辺を窺った  
りするが、「のどやかにさまよ」(⑤八四)き懸想人の一線か  
ら踏み出せない。大君一人に熱を上げ、「心いられ」(⑤八四)  
しているのは、蔵人少将である。薫は、いかにも「矮小化  
された柏木像」としての造型が目立つ蔵人少将に対し、む

しろ、その觀察者的な立場に身を置かされている。「人もゆるさぬ」禁忌の恋に身をやっていたのは柏木その人であったが、柏木の「矮小化」として描かれるのは、薫ではなく、蔵人少将であった。手習巻における中将は、ミニ薫としてその言動や振舞いなどがいかにも「まめ人」<sup>⑤</sup> 薫を髣髴とさせながら、道心を持つが故に女君との独特な恋の形が織り成された薫とは違い、女君と深く関わり合うことができず、沈黙する女君の前でひとり空回りする、滑稽味を浴びた人物として描かれている。そして中将の挿話によって「二重の意味―懸想そのものにより追い詰められる」という必然と、「あはれ」の世界の相対化というもう一つの文脈的必然と―で、浮舟の出家は導かれ<sup>⑥</sup> てくるのであり、薫と浮舟のための最後の舞台が用意されてくると言えるのである。

### 三

以上、中将の懸想をめぐる「女郎花」の類用、薫との関わりの中での中将挿話の意味について見てきたが、まず明らかかなことは、「浮舟と中将・妹尼との徹底した断絶」である。中将らの関係の「皮相性・空虚性」が露わになっていく中で、中将との交渉を拒否し続ける浮舟は、沈黙を守る

ことで存在の重みを増していく。沈黙する浮舟と、俗的な中将と、浮舟をわが娘の身代わりとしか認識しない妹尼の様子が描かれていく中で、物語は、どこに向かつていこうとしているのであろうか。

「前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出して、忍びやかにおはせし人の……」<sup>⑥三〇四</sup>。浮舟は供人たちの先払いの声を聞き、気品のある男君が邸内に入ってくるのを内からながめる。浮舟は、中将の訪問を通して「過去」の貴顕の世界を「さやか」に思い出す。妹尼たちが中将の願望を口に行っているのを聞いて浮舟は「あないみじや、世にありて、いかにもいかにも人に見えんこそ、それにつけてぞ昔のこと思ひ出でらるべき、さやうの筋は、思ひ絶えて忘れなん」<sup>⑥三〇七</sup>と思う。中将は、浮舟のことを、初瀬に参詣して不思議ないきさつで見つけ出した人だと禪師の君から聞くと「あはれなりけることかな。いかなる人にかあらむ。世の中をうしとてぞ、さる所には隠れむけむかし。昔物語の心地もするかな」<sup>⑥三一一</sup>と、世を厭わしく思い小野の山荘に隠れ住んでいることに興味を示す。荒廢した邸に住む姫君と男主人公との間で恋物語が展開するといった類の話は、『大和物語』一七三段、『住吉物語』などにその典型が見られるが、『源氏物語』の帚木巻や末摘花

巻などにも「昔物語」の用例とその具体相が描き出される。これらの例は、男性貴族の好奇心をそそる一つのエピソードとして、また、若き光源氏の恋の経験譚としてそれなりに魅力的な恋物語になり得ているが、手習巻の中将は、恋物語への発展の機会すら与えられず、女君の沈黙の前にとり空回りし、やがて舞台から退場することになる。浮舟は、ただ、自分がこの世に生きていることを人に知られたくないと思うのみであるが、そうした浮舟の内面が妹尼たちには全く理解できず、浮舟のことが「世づかず、人に似ぬ人」(⑥三二三)に見えるばかりなのである。

中將との結婚は、浮舟には、薫と匂宮との間で板ばさみになっていたつらい経験をよびさますことにつながる。中將の言動や振舞いなどが、物語世界に薫を顕現させていることを前に述べたが、そうでないように見えながら露骨に自分の心を打ち明けるその求愛の言葉が、物語上にまざまざと薫を想起させている。中將は、浮舟について語ろうとしない妹尼に対して「うちつけ心ありて参り来むにだに、山深き道のかごとは聞こえつべし。まして思しよそふらん方につけては、ことごとく隔てたまふまじきことにごそは。いかなる筋に世を恨みたまふ人にか。慰めきこえはや」(⑥三二二―三)と、自分の本音を打ち明ける。薫も大君に対

して「世の常になよびかなる筋にもあらずや。ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて」(総角⑤二三〇)と似たような言いぐさをしていたが、単に女君への接近の仕方が似ているというだけではなく、道心へのこだわりがその造型の重要な部分をなしているということに注目したい。

中將が三度目に小野を訪れる場面には、中將が「文などわざとやらんは、さすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず、もの思ふらん筋何ごとと知らねどあはれなれば、八月十余日のほどに、小鷹狩のついでにおはしたり」(⑥三二四)とある。中將と妹尼は「待乳の山」の引歌を駆使して会話を交わした後、次のような和歌を贈答する。

(中將) 松虫の声をたづねて来つれどもまた萩原の露にまどひぬ

(妹尼) 秋の野の露わけきたる狩衣むぐらしげれる宿にかこつな

(手習⑥三二五―六)  
中將の和歌に見える「萩原」の語は、夕霧巻で、夕霧が落葉宮を訪れる場面における夕霧の和歌「萩原や軒端の露にそぼちつつ八重たつ霧を分けぞゆくべき」(④四一―二)においても見られる。この夕霧の歌に対して落葉宮は「分



けゆかむ草葉の露をかごとにてなほ濡れ衣をかけんとや思ふ」と、露に濡れるの言いがかりにして、この私に濡れ衣を着せようという心づもりなのですか、と切り返す。この二人の贈答の前には、二人によるもう一つの贈答歌「落葉宮 われのみやうき世を知れるためしにて濡れそふ袖の名をくたすべき」(夕霧) おほかたはわれ濡れ衣を着せずともくちにし袖の名やはかくるる」が あったのだが、そこには「涙に濡れる」とことと「濡れ衣を着せられる」ことからの連想で「朝露」が導き出されており、そこから前者の贈答歌が詠まれたものである。これらの例は、単なる歌語の一致というレベルを超えて、夕霧と中将が物語のより深いところにつながっていることを示すものである。夕霧の落葉宮を訪問する時期は、中将の場合と同じく「八月中の十日ばかり」(夕霧④三九七)とあり、「うひうひし」「家路は見えず」(中将の場合は「見えぬ山路」(⑥三二七)など酷似した言葉の例が散見する。中将は薫だけではなく正編の夕霧とも重ね合わせられている。そのことは、物語が中将の造型を正編世界から受け継がれてきた類型的な恋物語の主人公のイメージを用いながら、物語そのものに内在する人間関係の空虚性・断絶の中で空転せざるをえない人物として、方法的に登場せしめていることを意味するので

はないか。中将の歌ことばが空虚な修飾のように聞こえるのはそのためであろうし、そうした中将のひとりよがりな言動が浮舟の共感を得ることはあり得ず、中将は浮舟出家の直接的な契機を作った。

蘇生直後の浮舟は、尼君たちの初瀬参詣への同行を拒否したが、物語の内部世界には、浮舟の死を決意した意志を再生への道へと変化させたたかな力のようなものが流れている。手習巻の物語は、浮舟の意志がかつての「世」を拒否し、新しく生きようとする力に変わる、その過程を描いたものとも読める。浮舟にとって中将が、過去を思い出させるよすがに過ぎない以上、浮舟は中将を回避するほかないのであるが、中将に同調して風流ぶる尼たちの存在も、浮舟を不安がらせる「うしろめた」(⑥三二七) 二者たちに過ぎない。風流気取りの小才子中将も、それに調子を合わせて若やぎ浮きたつ尼君たちも、すべて浮舟の内面とは無縁である。妹尼は「例の人にてあらじと、いとうたたあるまで世を恨みたまふめれば。残り少なき齢の人だに、今はと背きはべる時は、いとも心細くおほえはべりしものを」(⑥三二五)と、浮舟の前途を案じて「親がり」言うが、浮舟は、中将との結婚を暗に強要する妹尼たちを、自分の真の保護者たるべき存在ではないと「うしろめた」さ

を感じる。中将の三度目の来訪の折、返事を責める妹尼に對して浮舟は、「さやうに世づいたらむこと言ひ出でんもいと心憂く」(⑥三二五〜六)と思ひ、妹尼への返事さえしなかつた。

蘇生後、浮舟は、身上を明かさなことを恨む妹尼に對し「世の中になほありけりといかで人に知られじ。聞きつる人もあらば、いとみじくこそ」(⑥二九九)と言つた。尼たちの娘や孫で宮仕えをしていたり、それとは違つた生活をしている(⑥三〇三)者たちに對し「かけても見えず」といふのも、同じ理由である。即ち「世の中になほありけりといかで人に知られじ」といふのは、浮舟の蘇生後より一貫している心情である。そして過去への繋がりを忌避する浮舟の心境が、中将との縁組を願う尼君たちの心情と對立する仕組みなのである。しかし、周りの尼君たちは「心より外に、世にうしろめたくは見えたまはぬものを」(⑥三二六)と、浮舟を「ひき動かしつべく」勧める。中将の登場は、浮舟の孤立を一層浮彫にし、彼女を出家の途へ確實に導いている。

かかる古代の心どもにはありつかず、いまめきつつ、腰折れ歌好ましげに、若やぐ気色どもは、いとうしろめたうおぼゆ。限りなくうき身なりけりと見はててし

命さへ、あさましう長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、  
(手習⑥三一七)

尼たちの「腰折れ歌好ましげ」に浮き立つ様子に、浮舟は不安の一念に駆られる。ここには、入水に失敗した無念さに結びついた(さすらひ)への恐れが表れており、その思いは、後文で「ひたぶるに亡きものに人に見聞き棄てられてもやみなばや」という氣持へとつながっている。浮舟の人生は「さすらひ」<sup>(18)</sup>という言葉に集約されると言つてもよい。彼女はその名前どおり、安住することのない、浮いている舟のような存在であつた。ここで浮舟は、中将の懸想という危機的な状況の中で、自分の半生そのものであつた(さすらひ)への不安を覚えてゐる。蘇生直後に「いかなるさまにさすらへけんなど、思ひやり世づかずあやしかるべき」(⑥三〇三〜四)と、他人の想像に思いをめぐらしていたところにも「さすらひ」の語が見えていた。そして、中将の執心につけ、男というものは執拗なものだつたと、匂宮との体験を思い出す浮舟である。「いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをりも、やうやう思ひ出づるままに……」(⑥三三二)。妹尼には、中将の歌にも返歌をせず、尼たちの合奏にも加わらない浮舟が「もの思ひ知らぬ」(⑥三三二)人のように

思われていたが、浮舟は、「よろづにつけて世の中を思ひ棄」  
⑥三三三)て、孤立するほかなかつた。そして、自分が(さ  
すらひ)をつづけるよるべのない身の上になつたのは、匂宮、そ  
の人の縁のためであつたと浮舟が自覚していること(ただ、  
この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小鳥の色を例に契  
りたまひしを、などをかしと思ひきこえけん、とこよなく飽き  
にたる心地す」⑥三三二)に注意を払いたい。

浮舟は一途な男の懸想から逃れる道は出家しかないこと  
に気づく。九月、初瀬詣に出かける尼君たちは、浮舟にも  
同行を勧誘するが、浮舟は「知らぬ人に具して、さる道の  
歩きをしたらんよ」⑥三三四)と、拒絶する。出かけてい  
く尼君たちを見送り、「頼もし人に思ふ人一人ものしたまは  
ぬ」⑥三三五)自分の身の上を思う浮舟のところに、中将  
が四度目の訪問をする。例によつて浮舟に「あはれ」を求  
める中将は「山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は  
思ひこそ知れ」⑥三三八)と詠みかけながら「おのづから  
御心も通ひぬべきを」という。浮舟は、ただ気味わるくば  
かり思っていた老尼の居室に逃げ込む。浮舟は、地獄のさ  
まを連想させる老尼たちの大きないびき、母尼君のいたち  
のような動作におびえる。「いと恐ろしう、今宵この人々  
にや食はれなと思ふも、惜しからぬ身なれど、例の心弱

さは、：」⑥三三九)。浮舟は、いよいよ次のような思念  
を抱くようになる。

さらに、ただ今食ひてむとするとぞおほゆる。鬼のと  
りもて来けんほどは、ものおほえざりければ、なかな  
か心やすし、いかさまにせんとおほゆるむつかしさに  
も、いみじきさまに生き返り、人になりて、：

(手習⑥三三〇～三三二)

後文で、浮舟は、もし自分が死んでいたならば、この恐ろ  
しきものたちよりもっと恐ろしい地獄の中にいたことだ  
ろうかと思う。秋山虔氏は「この想念は浮舟の前進の契機  
となつた」と述べる。「亡きものと身をも人をも思ひつつ  
棄ててし世をぞさらに棄てつる」「限りぞと思ひなりにし  
世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」⑥三四一)。つ  
らなっているこの二首のうたは、浮舟の再生の回路をよく  
示している。そして浮舟が真の出家の決心に思い至つたそ  
の瞬間、彼女自身における「過去」の意味がようやく明ら  
かにされる。

昔よりのことを、まどろまれぬままに、常よりも思ひ  
つづくるに、(イ)いと心憂く、親と聞こえけん人の御  
容貌も見たてまつらず遙かなる東国をかへるがへる年  
月をゆきて、(ロ)たまさかにたづね寄りて、うれし頼

もしと思ひきこえしはらからの御あたりも思はずにて  
絶えずぎ、(ハ)さる方に思ひさだめたまへりし人につ  
けて、やうやう身のうさをも慰めつべききはめに、あ  
さましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、(二)  
宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけし  
からぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと  
思へば、小鳥の色を例に契りたまひしを、などてをか  
しと思ひきこえけん、とこよなく飽きにたる心地す。  
(ホ)はじめより、薄きながらもどやかにものした  
まひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞこ  
よなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられた  
てまつらむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さす  
がに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、  
いつかは見んずるとうち思ふ、なほわろの心や、かく  
だに思はじ、など心ひとつにかへさふ。

(手習⑥三三二) (三三三)

浮舟は流離するわが半生について自ら認識し、出家の決  
心をいよいよ固めてゆく。(イ)には自分の生い立ちが、(ロ)  
には中君との二条院での出会い、(ハ)には薫との契りとそ  
の破綻、(ニ)には、匂宮に惹かれていたわが心を悔いる心  
境、(ホ)には薫をなつかしく思う気持と、その慕情を打ち

消そうとする心情、がそれぞれ述べられている。匂宮に対  
しては「こよなく飽きにたる心地す」と、もうごりごりだ  
としているが、薫に対しては「さすがに、この世には、あ  
りし御さまを、よそながらだに、いつかは見んずる」と、  
かすかな慕情を覚えていた浮舟である。森一郎氏は、浮舟  
が「薫に対するはずかしさを意識の中心にすえていること」  
は「浮舟の自己意識の明確な把握であり自己発見というべ  
きものである。この自己反省、自己の発見こそが浮舟の  
出家の自覚的な第一歩である」と述べる。また、浮舟が薫  
をなつかしむのは、浮舟における薫の存在の独自の重さに  
よる。薫は浮舟の保護者であったし、浮舟は薫に「はづか  
しさ」を覚えていた。薫に対する浮舟の感情の形は手習巻  
になって鮮明に見えてくる。互いに惹かれあつていながら  
交わらない男女の姿が宇治十帖後半部の「手習」「夢浮橋」  
巻に美しく描き出されている。

手習巻で浮舟によって詠まれた九番目の手習歌は、新春

出家して尼の身となつた浮舟が往時を追憶しながら詠んだ  
歌「袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほ春のあ  
けほの」(⑥三五六)である。この一首は、歌の前に「こと  
花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみに  
けるにや」とあり、紅梅との関連から、歌中の「袖ふれし

人」が匂宮のことをいうと解されてきたが、当該歌の「袖ふれし人」が誰なのかを明らかにするために、宇治十帖の別の巻に存在する、この歌と非常に類似した語句を持つ歌一首「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて根ごめうつろふ宿やことなる」(早蕨⑤三五七)が参照されるべきであろう<sup>(2)</sup>。この歌は、大君亡き後、上京を目前にした中君がいる宇治を訪れた薫が詠んだ歌で、中君の歌「見る人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香ぞする」に対する返歌として詠まれたものである。歌の前の地の文には「御前近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見過ぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば」(⑥三五六)とあり、紅梅の花の香に薫の身の芳香が加わり、昔人を思い出させるよすがとなっている。つまり、紅梅との関連が物語上に語られているのは、匂宮だけではなく、薫も、白梅だけではなく紅梅の花とも深く関連づけられていたのである。「袖ふれし人」を薫以外の別の人物とすることは難しいのではないだろうか。浮舟が出家の決心に思い至った時の心内語には、匂宮に対して「こよなく飽きにたる心地す」とはつきり語られていたし、しかも、浮舟が「袖ふれし」の手習歌を詠んだその直ぐ後には、妹尼の甥にあたる紀伊守という初出の人

物が小野を訪問して薫の動静を語る場面が設けられている。これは、浮舟の出家直後、女一宮の夜居に侍した横川の僧都が浮舟のことを中宮に語る場面(⑥三四五〜七)と同様、薫を舞台に呼び寄せるための意図的な展開と見るべきであろう。次巻で横川の僧都を訪ねた薫がこの始終を知ることになる(夢浮橋⑥三七三〜八二二)のはこれらの場面を受けたものといえる。

浮舟の半生は「頼もし人」(⑥三三五)を追い求めて過ごした時間であった。東国で過ごした幼少時代、義父常陸介との不和、左近少将との婚約の破綻、薫と結ばれたが情熱で多感な匂宮に身も心も惹かれていたこと……。そして死を超えて(いま、ここ)に浮舟がいる。初瀬観音に守られ二度目の生を得た浮舟は、その初瀬への参詣を拒否した後、次の和歌を詠む。「心には秋の夕をわかねどもながむる袖に露ぞみだる」(⑥三三六〜七)。歌の直前の地の文には「夕暮の風の音もあはれなるに、思ひ出づること多くて」とある。この歌は、蜻蛉巻で薫が女一宮を思慕するわが心を省み、わが半生を回顧しながら詠んだ歌「萩の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける」(⑥二五九)と対をなすものである。「夕ぞわきて」「夕をわかねども」と微妙に違っている点、この二人の男女の行く先を暗示している

のかもしれない。前述のように、薫は、手習巻に直接はその姿を現さず、巻は、女主人公のみの舞台になっているかのようにあるが、姿を消したわけではなく、浮舟を中心とした物語の流れの中で、薫はその存在感を見せているというべきであろう。

#### 四

薫が僧都に浮舟再会の案内役を懇請したその夜、初夏の闇の中を横川から下山する薫一行の松明の光は、小野の山荘からも遙かに望まれていた。「小野には、いと深く茂りたる青葉の山に向かひて、紛るることなく、遣水の螢ばかりを昔おぼゆる慰めにてながめたまへるに、…」(夢浮橋⑥三八二)。浮舟は小野の庵室で青葉の山に向かい、遣水の螢を眺めている。螢の光は、薫の行列のかかげる火に変わる。尼君たちは、横川からの礼状に触れ、薫のことを「女二宮の御夫にやおはしつらむ」と憧憬する。浮舟は、尼君たちの物言いを聞きながら複雑な感慨をもよおす。「まことにさにやあらん」。しかし、浮舟は「今は何にすべきことぞ」と、薫への情念を振り切ろうとする。浮舟の眼は彼女自身に向けられている。そのため、薫や他の人たちに到達できないところに彼女はいる。浮舟と共感すること

なく空回りするような中将の「あはれ」と、紀野守が語る薫の動静を聞いて「忘れたまはぬにこそはあはれと見たまふにも」(手習⑥三六〇)と、薫へのせつなさを感じる浮舟の心情との落差は大きい。手習巻には、脇役である中将がこの巻で初出でありながら浮舟の出家過程の中でその出家の引き金となることが克明に描き出されている。ミニ薫として登場してきた中将が、浮舟の出家のきっかけとなるというアイロニー。それは本稿の最初に示したように宇治十帖の後半部に入って男性より女性主体の重さが浮き彫りにされること、いうなれば〈男の矮小化〉に関わる。薫と浮舟の関係は、以前の巻々において匂宮と浮舟の間で起きたことに比べれば読む側に深い印象を残す場面が多くない。そのためこの物語の主人公は匂宮である、あるいは匂宮と薫の兩人であるとする意見があるのだが、以上述べてきたことは、この物語の主人公が薫である理由の重大な証明の一つになるといえるのではないか。自分自身と向き合う時間を経て、女君は男君との対面を拒否するに至ったのであるが、この男は、物語の最後に女君を「人の隠しすゑたるにやあらん」(夢浮橋⑥三九五)、誰かがかくまっているのではないか、という思念を抱く。物語はもはや男女がつかっていることが不可能な世界を描くに至ったのだ。それ

は光源氏の物語では描き得ない世界であった。手習巻で、浮舟がなつかしさを感ずる対象は薫でなければならなかった。形代としての受動的な姿が印象づけられてきた女性の内面の深化が物語世界に描き出される中、相手の男君はそのままであるという男女間の構図を、物語は中将という初出の人物を通じて方法的に示してくれたといえるであろう。そしてこの薫は、物語の最終巻で「作者の思想の最も恐ろしい姿<sup>(2)</sup>」を垣間見させた後、後続の『狭衣物語』で、生の本質に関わる根源的な問題を抱えたまま愛の遍歴を続ける孤独な男主人公として復活するのである。

【注】

- (1) 原岡文子「「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」『源氏物語の人物と表現―その両義的展開』翰林書房、二〇〇三年。
- (2) 小野村洋子「源氏物語の精神的基底の終極と物語の世界」『源氏物語の精神的基底』創文社、一九七〇年、初出は、「源氏物語における『あはれ』の一課題」『共立女子大学紀要』二二、共立女子大学、一九六六年。
- (3) 以下『源氏物語』の本文の引用は小学館の新編日本古典文学全集を用い、巻数・巻名・頁数を記す。
- (4) 後藤祥子「手習いの歌」『講座源氏物語の世界』九、有斐閣、一九八四年。
- (5) 本歌は「世の中にあらぬ所もえてしがな年ふりにたるかたちかくさむ」(拾遺・雑上・読人しらす)。浮舟は、三条の隠れ家で、この歌を引いて母君と唱和していた。
- (6) 西郷信綱「長谷寺の夢」『古代人の夢』平凡社、一九七二年。
- (7) 森岡常夫「浮舟論」『平安朝物語の研究』風間書院、一九六七年。
- (8) 柳井滋「初瀬の観音の靈験」『講座源氏物語の世界』九、有斐閣、一九八四年。
- (9) 新編日本古典文学全集『源氏物語』頭注。巻六、三三四頁。
- (10) 小野村洋子氏の前掲論文。
- (11) 高田祐彦「浮舟物語と和歌」『源氏物語の文学史』東京大学出版会、一九九八年。
- (12) 小山香織「源氏物語の女郎花」『むらさき』第四一号、武蔵野書院、二〇〇四年。
- (13) 高田祐彦氏の前掲論文。
- (14) 原岡文子氏の前掲論文。
- (15) 原岡文子氏の前掲論文。
- (16) 「まめ」「まめ人」という語の用い方が第三部では変容されている部分があると思われる。第三部では「まめ人」の変貌(「心変わり」)を描いているのではなく、「心変わらぬ人」

の色好みふりを描いているのであるが、手習卷の中將には、薫において見られていた「まめ」「まめ人」の変容の様相が見られない。

(17) 原岡文子氏の前掲論文。

(18) 長谷川政春「源氏物語の〈さすらひ〉の系譜」『日本文学論究』四〇、国学院大学文学会、一九八〇年。

(19) 秋山虔「死と救済」『源氏物語』岩波書店、一九六八年。

(20) 森一郎「山里の人々」『講座源氏物語の世界』九、有斐閣、一九八四年。

(21) 藤原克己「袖ふれし人」は薫か匂宮か―手習卷の浮舟の歌をめぐって―青山学院大学文学部日本文学科編『国際学術シンポジウム 源氏物語と和歌世界』新典社選書、二〇〇六年。高田祐彦氏の前掲論文にも、薫が白梅のみならず紅梅の花とも深く関連づけられていたことが指摘されている。

(22) 吉岡曠「源氏物語作中人物論(大君)」『別冊国文学 源氏物語必携Ⅱ』學燈社、一九八二年。